

編集後記

国際関係学部が大きく様変わりするのではないかという重大な時期、そして下記に記すようなわたし自身の進退に関する決断があった時期に編集長になってしまったこと、それによって関係者にはたいへんご迷惑が及ぶことになってしまいました。そんな時期にもかかわらず、高英求先生と伊藤裕子先生のご努力により、みごと『貿易風』7号を出すことができました。まずはお二人の編集委員に感謝申し上げたいと思います。

そして今号もまた多くの論文ほかを規定通り載せることができたことは、編集長としてたいへんな喜びであります。「中部大学国際関係学部論集」と副題のあるこの『貿易風』は、副題の通りこの学部の紀要ですが、これほど分厚く、また意欲的な投稿者が多く、さらにこれほど内容に富んだ紀要は、何度か大学を転任してきた経験のあるわたしには、いまだに経験のないほど立派で堂々とした紀要です。

それは、それなりに出版・編集の予算があり、かつまた予算に見合う投稿原稿があることによっています。大学は、何よりもまず「研究活動」という知識の生産と普及によって成り立つ機関です。是非とも、この勢いを維持して『貿易風』が、この大学、この学部の、研究教育のシンボルであり続けてほしいと思っています。

こんな感慨を残しつつ、わたしは2011年度をもって中部大学国際関係学部を去ることになりました。この第7号が発行した頃には、編集長としてだけではなく本学のメンバーとしても退いている頃になります。関係者のみなさんには、たいへん申し訳ないと思っております。

わたしが中部大学国際関係学部に赴任したのは、2009年の4月でした。退職したのは2012年3月ですから、3年間しかいなかったことになります。しかし本学を退職した年には、わたしはもう65歳を過ぎていましたから、この時期の日本の一般的な「定年」の歳になっていました。この大学にずっと奉職していたとしても、たいして役にはたたない年齢だったことはご理解下さい。また、この大学に奉職していても、たいしてみなさんのご期待に添えなかった理由は、ほかにもありました。

この大学の専任になって以後のこと、わたし自身の意に反して「日本文化人類学会会長」(2010～11年度)になってしまいました。この学会の会長だという精神的な負担は思いのほか大きく、また辛いものでした。そのほか同時期に「日本民俗学会理事」(2007～12年度)や、「東京都立大学社会人類学会会長」(2006年度～)になっていましたが、この点は本学専任になって以後も負担覚悟でおりました。さらに「中国民族学学会海外理事」(2010年度～)や、「国立民族学博物館運営会議委員」(2009～12年度)、「神奈川大学国際常民文化研究機構運営委員会委員」(2010～13年度)、「長崎大学中長期重点研究課題助言評価学外有識者」(2010～13年度)、「愛知大学国際中国学研究センター外部評価委員」(2010年度)、そして「日本学術振興会特別研究員等審査会審査委員(同審査部会部会長)」(2009～11年度)なども同時期に担当しており、これほどさまざまな外部の役員を担当していると、学内の研究教育だけでなく大学行政にも大きな支障がありました。そのため、わたしの属する中国語中国関係学科の諸先生や大学院専攻主任会議の林上研究科長には、多大な迷惑をかけてしまいました。ここに深くお詫び申し上げる次第です。

わたしの退職により、中部大学の多くの関係者が「正常な」役割分担のもとに、再び正常な運営が行えるようになるだろうことを期待して、ここに筆を擱きたいと思います。

〔編集長 渡邊 欣雄〕